

特集

# 宗教と芸能のあいだ

宗教芸能研究会

四年にわたる宗教芸能研究会の活動は、お定まりの「民俗学」や困い込み「芸能史」でもなく、棚上げの「宗教学」でもない場所からの問い掛け、試行であったといえる。多岐にわたる関心や課題が生まれる一方、専門や方法の違いを越えて、通底する問題意識や大きなテーマがあぶりだされてきた。

ひとつは宗教と芸能の狭間に生起する表現・儀礼行為の問題であり、もうひとつは、声や祭文など身体の磁場から照射される、(近代)の成立という問題である。小特集「宗教と芸能のあいだ」における三つの論考は、そうした流れの一端において執筆された。

近代以前の伊勢神宮でもっとも神に近侍し、とって代われない聖務を担ったのは「子良」と呼ばれた物忌の童女であった。山本ひろ子「聖なる者の光芒」は、子良の祭祀行為に目を凝らし、また子良が止住した子良館の活動の内実と軌跡を追いながら、変容の中に神宮における宗



教と芸能の結ばれを探る。

「ナンバ」と呼ばれる歩行・身振りは、なぜ演技の一技術となったのか。昨今、スポーツ界を含めてナンバ論が流行している中、ナンバの原点に立ち返り、伝統芸能におけるナンバの動きは何から来たのかを探ろうとしたのが福原敏男「ナンバ——湿田農耕の芸能化」である。湿田農耕具を用いた作業に由来するとの解釈は、今なお大きな影響力を放つ武智鉄二のナンバ論への異議申し立てと比べてよい。

十界曼荼羅として描かれた立山曼荼羅は、かつて立山修験により絵解きされ、多くの人々を立山浄土へと導いた。内藤正敏「浄土と地獄」は、立山曼荼羅の構造分析を土台に、都市の見世物にも地獄めぐりの語りがあり、蛇女などのおそろしい芸能が演じられた場所は都市の異界だったと指摘する。地獄と浄土という観点に立つとき、山の宗教民と都市の芸能民は、はからずも同じ顔を見せることになるのだ。